嫌われ者の俺はやり直しの世界で義弟達にごまをする2

Characters



Others

序章　義弟（ぎてい）たちの一度目の人生

幸せな人生だった。

愛するシャルル兄さんがこの世を去ってから数年。ついに私にも迎えがやってきた。

思い浮かぶのは、シャルル兄さんと過ごした楽しい記憶ばかりだ。

兄さんは最後の最後まで私たちを愛し、幸せをくれた。

私とリエンもそれに応えるようにシャルル兄さんを愛したつもりだが、兄さんの愛情の深さには到底かなわなかった。

「ジェイド兄様……」

ベッドに横たわり、起きている時間の短くなってきた私の手を、寂しくないようにと弟のリエンはずっと握ってくれている。

兄弟として、時にはシャルル兄さんを取り合う恋敵（こいがたき）として、リエンとは長い時間をともに過ごしてきた。

視線を向けると、彼は優しく微笑（ほほえ）んだ。その笑い皺（じわ）の深さに、互いに歳をとったのだなと、しみじみ感じた。

「ねぇ、ジェイド兄様。今日はシャルル兄様の命日だよ。シャルル兄様のお墓には、僕がちゃんと花を供えてきたから、安心してね」

――そうか、今日はシャルル兄さんの命日だったか……

毎年、シャルル兄さんの命日には必ず花を供えに行っていたのにな。

大切な日すら記憶の中から消えかけている自分自身に落胆する。

そんな私のことを気遣うように、リエンは話を続けた。

「シャルル兄様が死ぬ少し前、三人でした約束のこと覚えてる？」

その言葉に、小さくうなずいた。リエンが目尻を下げる。

三人で交わした約束。

それはシャルル兄さんが死ぬ間際に、冗談で口にした一言からはじまった。

「なぁ。もし、二人が一度目の俺に会うことがあったら……また、俺を愛してくれるか？」

「一度目、ですか？」

「うん。一度目の……はじめの人生では、お前たちにひどいことをたくさんしてしまった。そのせいで、辛いこともあったし、寂しい人生だった。けれど、もし許してもらえるなら、一度目の俺にも、この幸せを分けてやりたいなって思ってさ。俺ばかりこんなに幸せでいいのかなって、最近思うんだ。……ごめん、なんか変なこと言って」

シャルル兄さんの看病に付き添っていた私たちは、兄さんが口にした言葉の意味を理解するのに、少し時間がかかった。

シャルル兄さんが言う『一度目』のことは時折話題になることがあったので、大体の状況は把握している。一度目の人生において悲劇的な死を迎え、そしてもう一度やり直したのが、この人生なのだと。

この人生においても再び終わりを意識して、兄さんも思うことがあったのかもしれない。

確かに、一度目のシャルル兄さんの人生は悲惨だった。

できることなら一度目のシャルル兄さんを幸せにしてあげたいと思ったことは何度もある。

たとえ、シャルル兄さんを地獄に落としたのが自分自身だったとしても。

いや――だからこそ、私の手で幸せにしたい、と。

「もちろん、幸せにしますよ。もしかしたら今の兄さん以上に幸せにしてしまうかもしれませんね」

「ハハ、頼もしい言葉だな。でも、一度目の俺はなかなか手強いぞ」

「大丈夫、大丈夫！　僕とジェイド兄様がいれば、必ず幸せになるんだから」

私たちの言葉を聞き、シャルル兄さんは目尻を下げる。

「確かに……そうだな。今の俺は二人がいてくれたから、こんなにも幸せになれたんだ。じゃあ……頼んだよ」

――兄さんとの大切な思い出が蘇り、リエンを見る。

「一度目のシャルル兄さんを幸せにするって約束だろ？　覚えているよ」

「よかった。もしかしたら、ジェイド兄様はすぐにでも一度目のシャルル兄様に会いに行けちゃう

かもしれないから、僕とも約束してほしいんだ。僕が行くまで、抜け駆けしないでね！　シャルル兄様を独り占めなんてしてたら恨むから」

年甲斐もなく頬を膨らませるリエンがおかしくて、思わず笑みが漏れた。

そうだ。私も迎えが来たら……シャルル兄さんと同じように、やり直しがあるかもしれない。

この幸せを、兄さんに分けてあげるために。

「はは。リエンに恨まれると後が怖いからな。ちゃんと待っているよ、リエンが来るまで」

「うん。約束だよ。また二人でシャルル兄様を幸せにしてあげようね」

「あぁ、そうだな」

そんな約束をリエンと交わした。

そして半年後。弟のリエン、そして私たちの大切な子、アルマンとソフィア……私は大切な家族に囲まれて、幸せな最期を迎えた。

寂しくないようにと握られた手の温もりや、皆の泣き顔が徐々に薄れ、消えていく。

そして、無が私を包んだ。

――どれくらいの時間が経ったのだろう。

宙を浮いていたような感覚から、急に身体に重さを感じた。

次いで、光と温もり。

そっと目を開くと、懐かしい光景が広がっていた。

第一章　義弟たちのやり直し

――ここは……

幼い時の私の部屋によく似ている。死後の世界というものだろうか。だとすると、私の記憶から再現された場所なのかもしれない。

死後の世界でも意識を保ったまま過ごせるとは驚いた。

私はベッドから起き上がり、部屋の中を歩いてまわる。まだウォールマン家へ行く前に住んでいた家だ。ここには亡き父との思い出が、たくさん残っている。

「懐かしいな……」

亡き父からもらった大切なオモチャを手にとった。

だが昔のことを思い出しながら死後の世界を堪能していると、慌ただしい足音が近づいてくる。

そして、部屋の扉がバンッと開く。

「ジェイド兄様！　僕たち、本当に一度目に来ちゃってるよ!!」

「……え？」

現れたのは、興奮した様子のリエンだった。それも、子どもの頃の。

状況を把握することができず、私はリエンを前にしてしばらく固まっていた。

返す言葉が見つからない。黙ったままリエンを見ていると、リエンは「あれ？」と首をかしげる。
「もしかしてジェイド兄様、記憶がない？　僕だけこっちに来ちゃったんだ。じゃあ……シャルル兄様は僕だけの、もの？　……くふふ、どうしよう。毎日シャルル兄様を独り占めできるなんて夢みたい！」
「リエン。シャルル兄さんはお前だけのものじゃない」
私が黙っているのを良いことに好き放題言っているリエンに釘を刺した。リエンは「なーんだ、やっぱり兄様も来てたんだ～」と悪びれる様子もなく、いつもの調子だ。
しかし……本当に人生を逆行してしまうとは。
いまだに自分自身に起こった出来事が信じられず、小さくなった自分の手を見つめた。そうしていると、下からリエンが覗き込んでくる。
「ねぇねぇジェイド兄様。昔の家にいるってことは、まだ母さんたちは再婚前だよね」
「そうだな。シャルル兄さんがやり直した時は、私たちが訪れる前日に戻ったと聞いたが……」
部屋の中を見渡すが、荷物をまとめている様子はない。
まずは現状を把握することからはじめないといけないようだ。
「リエン。まずは情報収集だ。くれぐれもおかしな行動はせず、子どもらしく振る舞うんだぞ」
「わかってるって～。僕的には、ジェイド兄様こそ子どもらしくできるか心配なんだけど～」
「私なら大丈夫だ。リエンのようにお喋りではないからな」
「なにそれ。僕だって小さな頃は人見知りで臆病な可愛い美少年だったんだからねぇ～？」

「昔はそんな頃もあったな」
リエンと軽口を叩きつつ、幼い頃の自分たちがどのように過ごしていたか思い出しながら、私たちは母のもとへ向かった。
ダイニングへ到着すると、すでに母が朝食の準備をしていた。久しぶりの母との再会に胸が熱くなるが、表情には出さずにいつものように朝の挨拶をする。
「母さん、おはようございます」
「母様、おはよう」
「あら。おはよう。二人とも今日は早起きね」
母の優しい笑顔を見た瞬間、リエンは母のもとへ駆け寄って抱きついた。
「リエン？　どうしたの？」
「……怖い夢を見たの。母様がいなくなる、夢」
「まぁ！　それは怖い思いをさせてしまったわね。でも大丈夫。母様はちゃ～んと、ここにいるから。ね！」
母はリエンを抱き上げて、コツンとおでこを寄せる。
私たちが悲しい時や辛い時、いつもこうやって励ましてくれた。母の温もりと優しい微笑みを見れば、不安な気持ちが薄れていったのを覚えている。
すっかり幼い頃の自分になりきったリエンは、母に抱かれて満足そうな表情を浮かべていた。
演技というよりは素に近いリエンの行動を見習うべきか迷ったが、私はまだその域に達すること

ができそうにない。おとなしく席につき、朝食をとることにした。
三人で食卓を囲みながら、どう再婚のことを聞き出そうか迷っていると、母のほうが先に話を振ってきた。
「この家を出るまであと二週間だけれど、少しは荷物の整理ができたかしら？」
二週間後……つまり現在の私は八歳、リエンは五歳か。
「少しずつ整理してるよ」と答えると、母は安心した表情を見せた。
――確か、荷物の整理はギリギリまで行わなかった。口にこそ出さなかったが、再婚についてよく思っていないことを、態度で示していたつもりだった。母には迷惑をかけたと思う。
あの時は自分が二人を守らなければと不安でいっぱいだったが……今は違う。
早く、シャルル兄さんに会いたい。
「うん。この後、終わらせるつもり。侯爵様ご一家と家族になれると思うと、嬉しいよ」
「本当？　よかったわ……二人とも不安なんじゃないかって、心配していたから」
「大丈夫だよ、母様！　新しい父様と兄様に会えるの、楽しみ～！」
「ふふ。そうね。私もシャルルさんに会うのは初めてだから、楽しみなの。ケインさんに写真を見せてもらったけど、すごく可愛らしい子なのよ」
「そうなんだ。お会いできるのが、すごく楽しみだよ」
母とシャルル兄さんについて話しながら、一度目の時を思い出す。
幸せと、笑顔と、愛に溢れた人生だった。

シャルル兄さんがいたから、三人だったから、あんな幸せな人生を歩むことができた。
今回はきっと、それ以上に幸せな人生を三人で歩んでいけるはずだ。
楽しい想像は膨らむばかりだった。

◇◇◇

あっという間に二週間が過ぎ、ウォールマン家へ向かう当日を迎えた。
一刻も早く兄さんに会いたくて、急かすように荷物を馬車へ詰め込む。出発時間よりも早く準備が終わった。
「ふふ。ジェイドったらそんなに急いで。よっぽど楽しみなのね」
「はい。早く父さんと兄さんに会いたいです」
「そうね。さぁ、荷物も積み終わったことだし、出発しましょうか」
ウォールマン家へ向かう道中も母は楽しそうに、義父や新しい家の話をしてくれた。
リエンも私も、シャルル兄さんと会えると思うと興奮を抑えきれなかった。
会ったらなにを話そうか、シャルル兄さんは私たちに優しくしてくれるだろうか。
色々考えていると、あっという間に時間は過ぎていき……懐かしのウォールマン家へ到着した。
小さな身体で見上げるウォールマン家の屋敷はやはり立派だった。
前回は、この大きな屋敷がやけに恐ろしかったのを思い出す。

「やっと戻ってきたな……」
「うん。そうだね」
小声で呟くと、リエンが嬉しそうな笑みを浮かべた。
しばらく待つと玄関の扉が開き、父が現れた。懐かしい顔だ。
……だが、シャルル兄さんの姿は見当たらない。
「フロル、長旅お疲れ様。ジェイドとリエンも、遠いところからよく来てくれたな」
父は私たちの頭を撫でてくれた。父に挨拶を返していると、母が不安そうに口を開く。
「ケインさん……シャルルさんはどうしたの？　体調でも崩されたのかしら？」
シャルル兄さんの名前が出ると、父はバツが悪そうな顔を見せた。
「声をかけたんだが……今は行きたくないと言って部屋にこもってしまってね」
「あら……残念だけれど、シャルルさんには改めて挨拶させてもらうわ」
「あぁ、すまないな」
母はとても残念そうに微笑んだ。
前回は、父とシャルル兄さんは揃って私たちを出迎えてくれたはずだ。
……さっそく、前回とは違う展開になってしまった。
部屋へ案内されて荷解きをしていると、リエンが私の部屋を訪れた。
「……シャルル兄様、出迎えに来てくれなかったね」
「そうだな。一度目の兄さんは、私たちを疎ましく思っているんだろう」

「わかってはいたけど、シャルル兄様に嫌われてると思うと……しんどい。やっぱり無理ぃぃ」
リエンは大きな溜め息をつきながらベッドに顔を埋める。
「まぁ、仕方ないさ。同じ屋敷に住んでいるんだ、少しずつ距離を縮めていけばいい。これくらいで落ち込むなんて、らしくないぞ」
「……そうだね。こんなことで弱気になってちゃダメだよね。よ～し、頑張るぞ！」
私も頭ではわかっているが、やはりシャルル兄さんから嫌われているのではないかと思うだけで憂鬱になってしまう。
自分にも言い聞かせるようにしながらリエンを励まし、シャルル兄さんが私たちに託した言葉を思い出す。
『また、俺を愛してくれるか？』
大丈夫ですよ、兄さん。
どんな兄さんだって、私たちは愛しますから。

◇◇◇

荷解きが終わる頃にはすっかり日が暮れて、夕食の時間になった。
ダイニングで父たちを待っていると、父と……その後ろに、シャルル兄さんの姿が見えた。
その瞬間、胸は高鳴り、今すぐにでも抱きしめたい衝動に駆られる。

何年ぶりだろう。最後まで幸せばかりだったけれど、それでも失ってしまったことは間違いない。
何十年も共に生きた、誰よりも愛しい人。
会いたくて、会いたくて、会いたくて会いたくてたまらなかった愛しい兄さん。
私とリエンは駆け寄りたい気持ちを必死に抑えながら、シャルル兄さんを見つめた。
しかし父が私たちのことを紹介している間、兄さんはうつむいたまま一向に顔を上げない。
「シャルル、皆に挨拶をしなさい」
そう父が促した瞬間、シャルル兄さんの表情が一変した。蔑むような視線を向けたかと思ったら、あからさまに私たちから視線を逸らし、口を開く。
「侯爵家の地位目当ての卑しいやつらと家族になるなんて……俺は絶対に嫌です」
シャルル兄さんはそれだけ言うと、ダイニングを出ていってしまった。
「なっ……！　シャルル！　なんてことを言うんだ、謝りなさい！　待ちなさいシャルル！」
虚をつかれた父は、慌てて兄さんの後を追いかけていく。
初めて聞く、シャルル兄さんの憎悪に満ちた声。怒りに満ちた表情。
私とリエンは、その場から動くことができなかった。
私たちが知るシャルル兄さんと、まるで別人なのではと思うほどの言葉と態度だった。
母さんもどうしたらいいのかわからないのか、困った表情を浮かべていた。
――これが……一度目のシャルル兄さんなのか。
まさか、言葉を交わす前に拒絶されるとは思ってもみなかった。

――感動の再会は、最悪の幕開けとなってしまった。
しばらくして、父だけが帰ってきた。
シャルル兄さんの態度について父が代わりに謝罪し、母は大丈夫だと返していたが、表情は暗い。
ウォールマン家での初めての食事は、兄さん不在のまま静かに終わった。
それから、リエンは自室に戻らず我が物顔で私のベッドへ飛び込むと、毛布に顔を埋めてバタバタともがきはじめた。
「リエン、私のベッドに八つ当たりするな」
「うぅぅ……だってシャルル兄様のあんな顔、初めてだよ。最初っからこんなに嫌われてるなんて思わなかったから……ジェイド兄様はなんでそんな平気な顔してられるの～？」
「……平気なわけないだろ」
私だってリエンがいなければ、今頃頭を抱えてベッドに崩れ落ちていただろう。
しかし、私たちが悲しんだところでなにも解決しない。
「ねぇ、ジェイド兄様。シャルル兄様と、これからどう接していったらいいんだろう」
「そうだな。普通なら少し距離をとって徐々に心を通わせるほうがいいのかもしれないが……シャルル兄さんの場合、時間をかけるほど悪化しそうな気がする」
「わかる。シャルル兄様、溜め込んじゃうタイプだから」
「あぁ。以前聞いた話の限りでは、父親をとられてしまうという恐れや亡くなったお母上に対する気持ちの整理がついていなかったことで、私たちに冷たくしてしまったということだったか」

シャルル兄さんは今、孤独なのだ。
屋敷の中で自分だけが仲間外れにされていると思っているのかもしれない。
大好きな父親を奪っていった私たち親子は、きっと悪者に見えていることだろう。
辛さや悲しみを誰にも打ち明けられずに過ごす日々が、兄さんの心を黒く染めてしまっている。
「私たちができることは、シャルル兄さんが好きだと伝えることだな」
「ずいぶん直球だね」
「鈍感なシャルル兄さんにはそれくらいがちょうどいい。キスされても『兄弟でもキスするんだ』と納得して受け入れてしまう人だぞ？　言葉や態度で好きだと伝え続けないと伝わらない」
「うん……そうだね。明日からはシャルル兄さんの冷たい視線に負けず、アタックあるのみだ！」
「よぉ～し！」と、リエンは意気込みながら自分の部屋へ戻っていく。
リエンが出ていったのを見届けると、ハァ……と、大きな溜め息が漏れた。
リエンにはあんなことを言ったが、シャルル兄さんは私たちを受け入れてくれるだろうか。
一度拒絶されただけで、こんなにも動揺してしまうなど思いもしなかった。
もしも嫌われて、絶縁でもされてしまったら……？　この二度目の人生を生きていける気がしない。
しかし、それでもやるしかない。
私たちがシャルル兄さんを幸せにすると、誓ったのだから。
不安な気持ちを打ち消すように、シャルル兄さんの笑顔を思い出しながら眠りについた。

翌朝。
兄さんは、朝食には顔を出さなかった。私たちを避けているのだろうか。
会いに来てくれないのなら、自分から会いに行って気持ちを伝えるだけだ。
私たちは朝食を持って、兄さんの部屋の扉をノックする。
すると、不機嫌な声ではあったが返事をしてくれた。
「シャルル兄さん。ジェイドとリエンです」
名前を告げると、返答はないものの近づいてくる足音が聞こえてくる。
部屋の扉がわずかに開き、シャルル兄さんが現れた。無表情のまま、私たちを見下ろしている。
「……なにしに来たんだ」
「お食事を持ってきました。朝食、まだですよね」
精一杯の笑顔を向けると、シャルル兄さんはちらりと料理へ視線を向け、舌打ちをする。
「いらない。お前たちが持ってきたものなど食べたくない」
冷たい言葉の後、部屋の扉が手荒く閉じられた。
ショックのあまり固まっていると、隣にいたリエンが私の袖を引っ張る。
「兄様。こんなんで傷ついてたらダメだよ！　今のシャルル兄様はあれが普通なんだと思わなきゃ！」
「そ、そうだな」
「次は少し時間をおいて、夕食前に会いに行こうかなぁ～」

リエンは平気な顔をして、スタスタと廊下を歩いていく。その切り替えの速さに呆気にとられていると、「なにしてるの兄様～。早く次の作戦練ろうよ～」と声をかけられた。
――リエンはすごいな。
我が弟ながら感心しつつ、私はリエンの後を追いかけた。

◇◇◇

それから二週間が経ち、私たちとシャルル兄さんの関係性はと言うと……
「シャルル兄様～。おはようございます！」
「シャルル兄さん。おはようございます」
「……うるさい。話しかけるな」
全く進展していなかった。
あれから毎日シャルル兄さんの部屋へ訪れたが、その度に罵倒され追い返される日々。
最近は声をかけても返事をしてくれないことすらあり、状況は悪化の一途を辿っていた。
食事には顔を出すようになってくれたが、私たちを見ると舌打ちをしたり睨みつけたりすることもしばしばだ。
今日もなにも進展せず、夕食を済ませた後はいつものように私の部屋で反省会を開いていた。
「ジェイド兄様～……どうする？　このままじゃ本当に嫌われちゃいそうだよ～」

「……少し、距離をとったほうがいいのかもしれないな。私たちの行動が裏目に出ているのかもしれない」
「確かに、そうだね。しばらくシャルル兄様の部屋に行くのはやめておこうか」
「そうだな」
さすがのリエンも、これではどうにもならないと感じたのか弱腰になっている。
当初はシャルル兄さんが寂しくないようにと声をかけ続けたが、どうやら逆効果だったようだ。
悪化していく状況を打開するには、時間を置くことも大切なのかもしれない。
そう決断してから三日が過ぎたが、シャルル兄さんとは相変わらずだ。
挨拶だけは必ずしているが、兄さんの不機嫌さは増すばかりだった。
私たちを睨みつける瞳にも、むしろいつもより怒りがこもっているような……
どうしたものかと考えながら、つい習慣でシャルル兄さんの部屋の前へやってきてしまった。
――兄さんの顔が見たい。
そう思い、部屋の前で立ち止まっていると、キィ……と静かに扉が開いた。
兄さんが顔を覗かせる。私がいるのとは逆側の廊下の先を見つめ、小さく溜め息をつく。
その様子は、まるで……誰かを待っているような雰囲気だった。
「……シャルル兄さん？」
「うわっっ!!　い、いるなら黙ってないで声くらいかけろ！」
「えっ……？」

声をかけた瞬間、シャルル兄さんは小さく飛び上がり、意外な言葉をくれた。
――もしかして……私とリエンが来るのを待っていたのか？
「シャルル兄さん。あの……私たちが来るのを、待っててくれてたんですか？」
「そ、そんなわけないだろ！　話しかけるな！」
シャルル兄さんは恥ずかしそうに顔を赤く染め、勢いよく扉を閉める。
「か、可愛い……」
久しぶりに、シャルル兄さんの可愛らしい姿を目の当たりにしてしまった。
私はしばらくなにも考えることができず、茫然と立ち尽くすのだった。

◇◇◇

兄さんの意外な一面を見てからというもの、いくら罵倒されようが冷たい視線を向けられようが、全くもって心に傷を負わなくなった。
そして、シャルル兄さんもまた少しずつ変化していった。
再びリエンとともに部屋を訪れるようになると「うるさい」「帰れ」と返事をしてくれるようになり、機嫌のいい時には少し顔を出して蔑むような表情で「鬱陶しい……」と言ってくれた。
投げかけてくる言葉は相変わらず棘があったが、完全に無視されることはなくなった。
わずかな変化でも、シャルル兄さんが私たちを意識してくれていると思うだけで嬉しい。

きっとこのまま兄さんと心を通わせていけば、またあの頃のように戻れる。
――事件が起きたのは、そう思っていた矢先のことだった。
視察の仕事から四日ぶりに戻ってきた父をリエンとともに出迎えると、父は笑みを浮かべて私たちの頭を撫でてくれた。
「お帰りなさい、父様」
「父さん。お帰りなさい」
「ただいま。二人とも元気にしていたか？」
「うん！　僕たちずっと良い子にしてたよ！　父様、明日はお出かけできるの？」
「ああ。ちゃんと仕事を終わらせてきたからな。どこへ行きたいか、決まったか？」
「え～とねぇ……」
三人でそんな話をしていると、シャルル兄さんも遅れて父を出迎えにやってきた。
だが……楽しそうに話をしている私たちの姿を見て、シャルル兄さんは悔しそうに私たちを睨みつけた。
そんな兄さんを、父は厳しい表情で叱った。
「シャルル。どうしてお前はいつも二人に辛く当たるんだ。そんな態度をとるのはやめなさい。お前は二人の兄なんだぞ」
「……俺は、コイツらの兄になったつもりはありません」
「はぁ……またそんなことを言って。今のお前の姿を見たら、死んだ母さんがどれだけ悲しむか」

「――っ!!　母様を悲しませてるのは父様のほうじゃないか！　母様を忘れて、裏切って再婚なんかして……！　コイツらなんて……大っ嫌いだ！」
シャルル兄さんは声を張り上げ、悲痛な胸のうちを曝け出した。
宥めようとしたが、その前に兄さんは私たちをキッと睨みつけ、自分の部屋に戻ってしまった。
「すまないな……」
父が大きな溜め息をつく。
「父さん、私たちは大丈夫ですよ」
心配そうにしている父に、私は笑顔を作ってみせた。
父とシャルル兄さんの関係は最悪だ。一度しっかり話し合うべきだと思うが、その話をどう切り出そうか迷っている間に、父は次の仕事へ向かってしまう。
「ジェイド兄様……。シャルル兄様、大丈夫かな？」
「大丈夫じゃないだろうな。様子を見に行こう」
兄さんの部屋を訪ねたが、その日はどれだけ声をかけても返事がくることはなかった。
次の日。昨日のことが気になって早めにダイニングへ向かったが、シャルル兄さんが朝食に顔を出すことはなかった。
父も昨日シャルル兄さんに怒ってしまったことを気にしているようで、「後で声をかけてみる」と母に話していた。
朝食を終え、外出着に着替えようと自室へ戻る。

今日は家族での外出だ。この機会にシャルル兄さんとの距離を縮められたらと思っていたが、昨日の様子では、私たちと一緒に出かけたりなんかしない、などと言い出しそうだ。
――せっかくのチャンスだというのに。
重い溜め息をつきながら、服に袖を通していく。
最後にジャケットへ手を伸ばすと……ジャケットが、切り刻まれていた。
「これ、は……」
ボロボロになった服を手にとり唖然としていると、部屋の扉が開いてリエンがやってくる。
「ジェイド兄様～準備できた？　って……ど、どうしたのその服!?」
私を迎えに来たリエンが、ジャケットを見て目を丸くした。
状況がうまく呑み込めず二人で立ち尽くしていると、扉のほうからクスクスと笑い声が聞こえた。
振り返ると……扉の前でシャルル兄さんがこちらを見ていた。
「卑しい子爵家生まれのお前にぴったりだな」
――シャルル兄さんが……こんなことを……
兄さんの言葉と無残に切り刻まれたジャケットを前にして、私はショックを受けるよりも先に兄さんのことが心配になっていた。
私たちの存在が、あの優しいシャルル兄さんをここまで変えてしまうのか。
シャルル兄さんが私たちに初めて見せた笑顔は歪んでいて……こんな顔をさせてしまった自分に、なにより腹が立った。

どう言葉をかけたらいいかわからず、私はただ苦笑いを浮かべ、受け流すように「そうですね……」とだけ兄さんに返した。

だがシャルル兄さんは眉間に皺を寄せ、乱暴な足取りで私のほうへ近寄ってきた。そして私の胸ぐらを掴み、怒りを露わにする。

「どうしてお前は、いつもいつもわかった顔でヘラヘラ笑ってご機嫌取りをするんだ！　俺は、お前のその顔が大嫌いなんだ！」

「兄さん……」

怒りをぶつけてくる兄さん。けれどその瞳は不安げに揺れ、今にも泣き出しそうに見えた。

私の胸ぐらを掴む手が震えている。そのことに気づいて、私は兄さんの震える手を握りしめようとした。だがその前に、準備が遅い私の様子を見に来たらしい父と母が部屋にやってきた。

「ジェイド。準備はできたか――っ、シャルル！　なにをしているんだ！」

「シャルルさん!?　一体どうしたの？」

父と母は私たちの姿を見て血相を変える。

――最悪のタイミングだ。

両親が私とシャルル兄さんを引きはがした。母は心配そうに私を抱きしめ、父は私の手にあるジャケットを見て、表情を険しくした。

「ジェイド、その服はどうした」

「これは……すみません。リエンがふざけてハサミで切ってしまったようです」

すまないリエン、と心の中で謝罪しながら嘘をつく。だがシャルル兄さんはそれも気に食わなかったのか、噛みつくように口を開いた。

「俺がやったんだ。子爵家生まれの卑しいやつにお似合いじゃないか！」

「――っ！　シャルル!!」

パンッと乾いた音が部屋の中に響き渡る。

シャルル兄さんはなにが起こったのかわからず、呆然としていた。

それから自分が父に頬を叩かれたのだと認識すると、下唇を噛みしめてうつむき、すぐに走って部屋から出ていってしまった。

静まりかえる部屋の中……最初に口を開いたのはリエンだった。

「父様！　シャルル兄様を叩くなんて、ひどいよ！」

リエンは小さな身体を震わせて、父に叫んだ。

まさかリエンが怒るとは思わなかったのだろう、父は目を見開いている。

「リエン、あれはシャルルが悪いんだ。ジェイドを傷つけるようなことをして……」

「私は大丈夫ですよ、父さん。今はシャルル兄さんの心配をしてください」

「……シャルルの？　シャルルは今までずっと、お前たちに冷たい態度をとってきたんだぞ？　今だってお前の服をそんな風にしてしまって……」

父の言いたいことはよくわかる。

普通なら、シャルル兄さんの態度に耐えきれず、嫌いになっていただろう。

けれど、私たちは違う。
どんなシャルル兄さんだろうと……愛している。
「父さん。シャルル兄さんが、なぜ私たちにあんな態度をとるのか、わかりますか？」
私が問いかけると、父はばつが悪そうに「いや……」と呟いた。
「シャルル兄さんは、私たちに大好きな父さんを奪われたと思っているんです。兄さんは寂しくて、辛くて……だからあんな態度をとってしまうだけなんですよ」
「そうだよ父様！　そもそも、父様は再婚の話をちゃんとシャルル兄様に話したの？　シャルル兄様の気持ちの整理がつかないまま再婚なんてしちゃったから、こんな事態になったんじゃない？　シャルル兄様は、本当はこんなことする人じゃないんだよ！　綺麗で可愛くて優しくて頑張り屋さんで……シャルル兄様は全てが最高なんだから！　だからシャルル兄様にあんな顔をさせちゃ……んぐんぐ」
五歳児らしからぬ口調でベラベラと余計なことまで喋りはじめたリエンの口を手で塞ぎ、父へ視線を向ける。父は険しい顔をしたまま考え込んでいた。
「シャルルが、そんなことを言っていたのか？」
「……はい。シャルル兄さんは、まだ心の整理がついていないようでした。シャルル兄さんの心の寂しさを埋めることができるのは、父さんしかいません」
「そう、だな……」
嘘はついていない。私たちは本当に、シャルル兄さんがその時どれだけ寂しく、辛かったかを兄

さん自身に聞いたことがあるのだから。
本当は私たちがその寂しさを埋めてあげたかったが、ここは父に譲ることが兄さんにとって最も良い選択だろう。
静かに会話を見守っていた母は終始不安そうな表情を浮かべていたが、話が終わると優しく私たちの頭を撫でてくれた。
「あなたたちは、シャルルさんのことが本当に好きなのね……」
「はい。大好きです」
「僕もシャルル兄様大好き～！」
私たちの言葉に、父も母も安堵の笑みを浮かべた。
両親を安心させることはできたが、問題はシャルル兄さんだ。
私はリエンの手をとり、部屋を飛び出していったシャルル兄さんのもとへ向かった。
部屋の扉をノックするが、返事はない。
「シャルル兄さん。ジェイドとリエンです。お部屋に入ってもいいですか？」
思い切って頼んでみるが、もちろん返事はなかった。
もう一度声をかけようとした時、か細い声が聞こえてきた。
「うるさい……来るな……」
その声は震えていた。
きっと、シャルル兄さんは泣いている。そう思うといてもたってもいられず、私とリエンは扉を

開けて部屋に入っていった。
　シャルル兄さんは、亡き母の肖像画の前で膝を抱え、うずくまっていた。鼻を啜り、必死に泣き声をこらえている姿に胸が激しく締めつけられる。
「シャルル兄さん……」
「シャルル兄様……」
　私とリエンが声をかけると、兄さんは目に涙を浮かべて、私たちを睨みつけた。
「どうしてお前たちはいつも良い子ぶって俺に話しかけてくるんだ。俺は、お前たちのことが大嫌いなのに、なんで……。お前たちだって、本当は俺のことなんて嫌いなんだろう！」
　そうか。シャルル兄さんは、私たちの本心がわからずに困惑していたんだ。私たちに嫌われていると思い込んで、それなのに優しくされる意味がわからず、怖がっていた。
　――私たちのシャルル兄さんに対する気持ちは……『好き』以外ありえないのに。
「私たちはシャルル兄さんのことが大好きですよ。兄さんにいくら嫌われようと、その気持ちは変わりません」
「そうだよ。僕たちはシャルル兄様のことが大好きだよ。シャルル兄様を嫌いになんて……絶対にならない！」
　シャルル兄さんは、大きな目を瞬かせた。そして、顔をくしゃりと歪めて小さな唇を震わせる。
「なんで……なんでお前たちは……そんな……そんなことばかり言うんだよぉ……」
　水色の瞳からポロポロと涙が零れ落ちる。今すぐにでもその涙を拭って、抱きしめたい。その気持ちを必死に我慢して、シャルル兄さんを驚かせないようにゆっくり近づいていく。
「兄様、泣かないで……」
「お前たちが悪いんだぞ。お前たちが……俺に優しくするから、もう……なにが、なんだか……わかんないんだよ……」
　うずくまるシャルル兄さんのそばに腰を下ろし、隣に寄り添う。
「私たちはシャルル兄さんのことを嫌いだなんて、一度も思ったことはありませんよ。むしろ、シャルル兄さんと仲良くなりたいんです」
「仲……良く……？」
　兄さんは顔を上げ、涙で濡れた瞳で私を見つめた。
「そうです。兄さんと仲良くなりたいんです」
　シャルル兄さんの小さな手を握る。振り払われそうになったのでギュッと握りしめると、抵抗をやめてくれた。
「なんでそう思えるんだ……？　俺は、お前らにひどいことを言ったんだぞ。服だって切り裂いて……」
「それは兄さんが寂しかったからでしょう？　父さんが突然再婚して、私たちが来て……自分の居場所がなくなったと思って、怖かったんじゃないですか？」
　なんで自分の気持ちを知っているんだ、とばかりにシャルル兄さんは驚いた様子で私を見つめる。
　兄さんのことなら全部お見通しだ、と言いたいけれど、これは以前、私たちにとっての一度

目……前回の世界で兄さんが語っていたことだ。
兄さんが小さな身体を震わせる。
――きっと……我慢の限界だったんだろう。
どうすればシャルル兄さんの心を癒やすことができるのか。
考える前に、私とリエンはシャルル兄さんをそっと抱きしめた。今の小さな身体では兄さんを包み込むことはできないが、私たちの精一杯の気持ちを込めて。
シャルル兄さんは驚いた様子だったが、そのまま私の胸に顔を埋めてくれた。
兄さんの黒髪にそっと触れ、優しく頭を撫でると、兄さんは声を押し殺してまた涙を流す。
「シャルル兄さん、一人で抱え込まないでください。悲しい時は、私たちが必ずそばで支えます。私とリエンは、どんな時も兄さんの味方ですよ」
誓うように語りかけると、シャルル兄さんはゆっくり顔を起こした。
「本当か……？」
「えぇ。嘘ではありません、本当です。シャルル兄さん」
私が微笑みかけると、横からリエンも負けじと口を挟む。
「シャルル兄様！　僕もずっとずっとそばにいてシャルル兄様を守るから、安心してね！」
エヘヘ、と可愛らしく笑顔を向けるリエンを見つめて、シャルル兄さんがボソリと呟いた。
「……リエンに守ってもらうのは頼りないな」
「えぇ!?　なんでそんなひどいこと言うの、シャルル兄さまぁぁ～」

大袈裟にショックを受けてみせるリエンがおかしかったのか、兄さんはクスクスと笑った。
久しぶりに見るシャルル兄さんの本当の笑顔は、以前と変わらずとても可愛らしく、綺麗だ。
その笑顔に吸い寄せられるように、私は思わず、兄さんの頬にキスをしていた。
突然の行為に驚いたのか、シャルル兄さんは目を大きく見開いて私を見つめる。
「ジェイド……なんで、キスしたんだ？」
「あぁ……えっと、この前読んだ本に書いてあったんです。憎しみの心を癒やすには、愛情を込めたキスが一番だ、と。仲直りする時にするんだとか……」
苦しい言い訳だが、シャルル兄さんは「そうか……」と納得してくれた。
本当はいつもの癖と、それから兄さんがあまりにも可愛らしかったからなのだが。
「キスなんて好きな者同士ですることだと思っていたけど……お前たちは仲直りする時、頬にキスをするのか？」
「え？　あー、はい……そう、ですね」
「それがお前たち流のやり方なら、俺もそうする。ジェイド、リエン……仲直りがしたい」
シャルル兄さんが私たちと仲直り……してくれる？
リエンと私は互いの顔を見合わせてから、大きくうなずいた。
「シャルル兄様！　仲直り、僕もする！」
「兄さん、仲直りしましょう！」
「うん。……ジェイド、リエン。今までひどいこと言って、ごめん。服を切って、ごめんな……。

これからは二人の兄としてふさわしい人間になる。俺を、許してくれるか？」
「うんっ！」
「もちろんですよ、兄さん」
シャルル兄さんは照れくさそうにそう言って、私とリエンの頬に優しくキスをしてくれた。
懐かしく愛おしい、兄さんからの柔らかなキス。
幸せで胸がいっぱいになり、蕩けてしまいそうになるのを必死に我慢する。
リエンが「僕からも仲直りのキス～！」と言って、シャルル兄さんの頬にキスをした。もちろん私もお返しをしなくてはいけないので、再度兄さんの頬に唇を落とす。
「あ！　ジェイド兄様ズルい！　シャルル兄様に二回もキスした～！」
「キスしてもらったお返しだから別にいいだろ」
「よくないよ！」
言い合いをはじめた私たちを見て、シャルル兄さんはクスッと笑みをこぼす。
「リエン。そんなに言うならもう一度仲直りのキスをしてくれるか？」
「え!?　いいのシャルル兄様！」
「あぁ、いいよ」
リエンの我儘を優しく聞いてくれる兄さんの姿は、以前のシャルル兄さんとなんら変わりない。
最初はどうなるかと思ったが、無事にシャルル兄さんの笑顔を取り戻すことができた。
嬉しそうにリエンからのキスを受け入れるシャルル兄さんを見つめ、私はホッと胸を撫で下ろす。

これからも、かけがえのない人の笑顔を守るために頑張らなくてはいけないと強く思う。
可愛い可愛いシャルル兄さん。
この世界でも、私たちはシャルル兄さんを愛し続けていきますからね。

◇◇◇

突然告げられた、父の再婚。
それはあまりにも衝撃的で、俺にとってはなにより残酷な話だった。
新しい家族が屋敷に来た日。俺は出迎えを拒否して、部屋の窓から馬車が到着するのを見ていた。
父は両手を広げ、嬉しそうに三人を出迎えていた。
母が亡くなって、一年。俺はまだ母の死とうまく向き合えずにいた。
父は領主の仕事が忙しく、母がいない寂しさを父が埋めてくれることはなかった。
でも、それでよかった。
領主として働く父の大変さは理解していたし、それは侯爵家に生まれた者の使命だ。いつか跡を継ぐ身として、そのことに不満を抱くことなんて、あるわけがない。
そんな父を尊敬し、自分なりに支えていければとさえ思った。それなのに……
父はいきなり再婚し、新しい母と弟ができるぞと笑顔で言ってきた。
義母も義弟も、いらない。俺には父がいれば、それだけで充分だったのに……

父は俺よりも小さな義弟たちが可愛いのか、笑顔で頭を撫で、義母と楽しそうに話をしている。
その光景を見ていると、心の中にどす黒い感情が渦巻いていった。
――俺は、父に裏切られたんだ。父は母さんも、俺のことも捨ててしまったんだ。
こみ上げる憎しみは、父を奪う三人の笑顔に向かっていった。
――許さない、絶対に許さない。父様を奪うやつらなんて嫌いだ。
部屋にこもったまま夜になり、父が俺を夕食に呼びに来た。
義母にも義弟たちにも会いたくない。それなのに、挨拶だけでもいいから顔を合わせてみないかと父は言う。
本当は顔も見たくないが、義母と義弟たちに好き放題されるのも嫌なので一言言っておこうと思い、父とともにダイニングへ向かった。
ダイニングに入ると、父が俺のことを紹介しはじめた。義母は優しそうに微笑み、義弟たちは俺をじっと見つめている。その表情や視線が嫌で、俺は三人を睨みつけて言い放った。
「侯爵家の地位目当ての卑しいやつらと家族になるなんて……俺は絶対に嫌です」
それだけ口にして、俺はダイニングを出ていった。父の叱る声が聞こえたが、無視した。
一人、自分の部屋に戻ってベッドにうずくまる。
――父様だって悪いんだ。いきなりあんなやつらを連れてきて。謝ったりなんてするもんか。俺は絶対に、あいつらと仲良くなんてしない。義母には思いっきり冷たい態度をとって、義弟たちは無視してやるんだ……

そんなことを考えながら一晩過ごし、目覚めの悪い朝を迎えた。
朝食を食べる気がせずに部屋にこもっていると、扉がノックされた。それに続いて、聞きたくない声。
「シャルル兄さん。ジェイドとリエンです」
昨日あんな態度をとったのに、どうしてのこのこやってくるんだろう。苛立ちながら少しだけ扉を開くと、ジェイドとリエンが朝食を手に笑顔を向けていた。
「……なにしに来たんだ」
「朝食を持ってきました。朝食、まだですよね？」
そう言って、ジェイドは朝食がのったトレイを差し出してくる。
二人は昨日俺になにを言われたのか、理解していないのか？
「いらない。お前たちが持ってきたものなど食べたくない」
俺は再び義弟たちを突き放すと、扉をバンッとわざととらしく乱暴に閉めた。
扉の向こうでヒソヒソとなにかを話す二人の言葉が聞こえてくる。
きっと俺の悪口を言ってるんだ。
でもそれでいい。俺だってお前たちなんて嫌いだ。大っ嫌いなんだ。
きっと次に顔を合わせた時には、さっきのような笑顔なんて消えているだろう。
――そう思っていたのに、義弟たちは違った。
「シャルル兄様～！　夕食一緒に食べに行きましょう～」

「シャルル兄さん。おはようございます。朝食を食べに行きませんか」
「シャルル兄様～！」
「シャルル兄さん」
毎日毎日、義弟たちは笑みを浮かべながら俺のもとにやってくる。
二人は一体、なにを考えているんだ……？
どうせご機嫌取りのつもりで、いつかは耐えられなくなるだろうと思っていたのに、どんなに冷たく接しても二人は変わらず俺に笑顔を向けてくる。
怯える様子もなく、俺を見つけると駆け寄ってくる二人に俺は困惑していた。
二人のことなど考えたくもない。
それなのに今日も朝からつきまとわれて、学園でも大きな溜め息をついてしまう。
「お！　子爵のご令息と家族になったシャルルじゃん！　どうしたんだよ、朝から大きな溜め息なんてついて」
「……うるさい、イザーク」
クラスメイトのイザークだ。俺の父が再婚したことを聞きつけたらしく、ニヤニヤしながら声をかけてくる。
「はは。ごめんごめん。そんなに怒るなって！　可愛い顔が歪んでるぞ～」
「可愛いは余計だ」
いつものように冗談を言いながら、イザークがじゃれついてきた。睨みつけると、「お～怖っ」

と怖がるそぶりを見せるが、顔はニヤついている。
「それにしても不運だよなぁ～。自分よりずっと低い身分に生まれた義弟とは」
「……そうだな」
「なぁ、義弟もこの学園に編入してくるんだろ？　一緒に登校するのか？　そしたら俺のこと、ちゃんと紹介してくれよなぁ～」
イザークは楽しみで仕方がないという顔だが、どうせ義弟をいじめたいだけだろう。
イザークは侯爵家の次男で、プライドがとても高い。自分よりも家格の低いクラスメイトのことは露骨に下に見ていて、よく意地悪なことを言っているのを目にする。
「お、子爵家のエレン様がご登校してきたぞ！　じゃ、またなシャルル」
「あぁ……」
イザークお気に入りのクラスメイトがやってきて、彼はそちらへ行ってしまった。
エレンは侯爵家の跡取りだが、元は子爵家の出身だ。親の再婚によって、侯爵家の一員となった。
もともと気が弱いこともあって、イザークに標的にされている。
朝からイザークに絡まれるエレンを不憫に思って見ていると、ふいに目が合った。
助けを求めるような視線を俺に向けてくるが、いつものことなので目を逸らす。
――普通、いじめられたらああいう顔をするよな。なのに、なんであいつらは……
一度そう考えると、なにをしていてもジェイドとリエンのことが何度も何度も頭に浮かぶ。おかげで今日一日、憂鬱な気持ちで過ごす羽目になった。

帰りの馬車でも義弟たちの顔や俺に助けを求めるエレンの顔がチラついて、モヤモヤした。
それなのに屋敷に到着して一番に、当の義弟たちとタイミング悪く顔を合わせてしまった。
「あ、シャルル兄様！　おかえりなさい～」
「お帰りなさい、兄さん」
「……」
大嫌いな二人からの言葉なのに、なぜか……母に出迎えてもらった時のような、温かさを感じた。
そんな気持ちを認めたくなくて、フンッと二人を冷たく無視して部屋へ向かう。
明日も続くであろう義弟たちのつきまといを、どうしたらやめさせることができるだろうか。
そして、次の日。
普段なら部屋の扉を叩く音と耳障りな声が聞こえてくる時間なのに、その日はやけに静かだった。
夕方になっても、誰も来ない。
来ても鬱陶しいだけのはずなのに、二人が来ないことが、無性に苛立った。
夕食時。ダイニングに行くと義母と義弟二人が仲良く食事をとっていた。
「あらシャルルさん、良いところに。ちょうど今ね、今日のお夕食の魚がシャルルさんの好物だって話をしていたのよ」
義母は嬉しそうな顔をしてそんなことを言ってくる。
俺がいつ二人に好物の話などしただろうか？
そんなことを思いながら食卓に視線を移すと、確かに俺の好物が並んでいた。

義弟たちにこっそり視線を移すが、ジェイドにいつもと変わった様子はない。
――今日は、たまたま来なかっただけなのか？　まぁ、来ないほうが静かでいいけどな。
そう思いながら俺は夕食をさっさと済ませ、自分の部屋へ戻った。
だが次の日も、その次の日も、義弟たちは俺の部屋に来なかった。
つきまといをやめさせるためになんて言ってやるか考えていたのに。無駄になってしまったな……
日に日に苛立ちが募っていく。なんで俺は義弟たちが来なくてイライラしているのだろう。
これじゃまるで、会いに来てくれるのを待っているみたいじゃないか。
そんなはずはない、と自分に言い聞かせていると、廊下の軋む音が聞こえた。
大人にしては小さな足音だ。義弟たちがやってきたのかもしれない。
……しかし、しばらく待っても扉がノックされる音は聞こえてこない。
――違ったのか……
部屋の扉を少し開けて、誰もいないはずの廊下を見つめた。
小さく溜め息をついた時、「……シャルル兄さん？」と声が聞こえてビクンッと身体が跳ねる。
「うわっっ!!　い、いるなら黙ってないで声くらいかけろ！」
「えっ……？」
思わず漏れた俺の言葉に、ジェイドは目を瞬かせた。
「シャルル兄さん。あの……私たちが来るのを、待っててくれてたんですか？」

カァァッと一気に顔が熱くなる。
「そ、そんなわけないだろ！　話しかけるなぁ！」
嬉しそうに目を細めるジェイドの視線に耐えられず、俺は逃げるように扉を閉めた。ベッドに飛び込み、シーツに顔を埋める。
「やっぱり……あいつ嫌いだぁ……」
ジェイドに見せてしまった醜態を思い出し、俺はジタバタとのたうちまわった。
――あれ以来、二人はまた俺の部屋を訪れるようになった。
なぜか以前よりも嬉しそうにしている二人に、正直言って戸惑っている。
どんなに突き放しても、罵声を浴びせても、二人が俺を嫌う様子はない。
もしかして、本当に俺と仲良くなりたいのか……？
そんなありえないことを考えてしまい、頭を振る。
あんなひどいことをされてもなお仲良くなりたいと言ってくるだなんて、逆に信用できない。
なにか企んでいるに違いない。そうだ、俺や父のご機嫌取りをして、この侯爵家を自分たちのいいようにしたいだけなんだ。
案の定、義弟たちは俺が思った通り行動をしてみせた。
久しぶりに視察から帰ってきた父を出迎えるなり、媚を売るような笑顔を向けて楽しそうに話をしている。その姿を見ていると苛立ってきて、睨みつけてやった。
俺の態度が気に障ったのか、父に叱責された。言い返すと、父は呆れたように言った。「今のお

前の姿を見たら、死んだ母さんがどれだけ悲しむか」……と。
その瞬間、俺の中のなにかがプツリと切れた。思い切り叫んで、泣きたくないのにこみ上げてくる涙を見られたくなくて、その場から逃げるように部屋へ戻った。
――父様もあいつらも、嫌いだ……大嫌いだ……
部屋の中でうずくまり、何度も何度も心の中で呟く。
扉の向こうからジェイドたちが心配そうに声をかけてきたが、胸に渦巻く負の感情は大きくなるばかりだった。
次の日。俺はジェイドの部屋へ忍び込み、外出用のジャケットを切り刻んだ。
ジェイドの悲しむ顔を想像しながら、ジャケットにハサミを入れた。
さぞかし爽快な気分になるだろうと思っていたが……それは大きな間違いだった。
切り裂かれたジャケットを見た瞬間、ジェイドの笑顔が脳裏をよぎり、罪悪感がこみ上げる。
――俺は悪くない。悪いのはあいつらだ……
心の中で言い聞かせながら、ジェイドの部屋を後にした。
朝食が終わった頃合いを見てジェイドの様子をうかがいに行くと、ちょうど俺が切り刻んだジャケットを手にして呆然と立っているところだった。
近くではリエンが驚いた顔をしてジェイドに話しかけている。
二人が立ち尽くす姿を見たら気分が晴れると思ったのに、胸はズキズキと痛むばかりだった。
自分自身の気持ちもわからないまま、俺は卑屈な笑みを浮かべて用意していた言葉をジェイドに

投げかけた。
「卑しい子爵家生まれのお前にぴったりだな」
だがジェイドは憐れむような笑みを浮かべて、「そうですね……」と言うだけで怒りも悲しみも見せようとしない。
気づくと俺はジェイドの胸ぐらを掴み、怒鳴り声を上げていた。
「どうしてお前は、いつもいつもわかった顔でヘラヘラ笑ってご機嫌取りをするんだ！　俺は、お前のその顔が大嫌いなんだ！」
ジェイドのアメジストの瞳が揺れる。
どうしてなにも言わない？　俺のことが怖いのか？　大嫌いだと言ってもジェイドが悲しむ様子はない。当然だ。俺のことなんてきっと嫌いだろうから。嫌いなやつに嫌いだと言われて悲しくなんてなるはずがない。
「兄さん……」
ジェイドがなにか言おうとしたその時、父と義母が部屋を訪れた。
無残な状態になったジャケットを見て、父は怒気を含んだ声でジェイドに尋ねる。
ジェイドが真実を告げれば、間違いなく父は俺を叱るだろう。
そう思っていたのに、ジェイドは嘘をついて俺を庇おうとした。
それが気に食わなくて、俺は自ら真実を告げた。
次の瞬間――怒鳴り声とともに、頬に走る鋭い痛み。

一瞬、なにが起こったかわからなかった。
徐々に頬の痛みが強くなって、父に打たれたことを理解した。俺はたまらず部屋を飛び出した。
父の怒りに満ちた視線。あいつらの憐れむ視線、全てが嫌になった。
自分の部屋へ逃げ込んで、母の肖像画の前でうずくまる。我慢していた涙がとめどなく溢れて床を濡らした。
父にも嫌われてしまった。もう、俺のそばにいてくれる人なんて誰もいない。
俺の居場所はここにはない、俺はずっと独りぼっちなんだ。
……そう思っていたのに。
扉を叩く音と、来るはずのない大嫌いな二人の声が、独りぼっちの部屋に響いた。
こんな姿を見られたくなくて「うるさい」と追い返したのに、二人は部屋の中にまで入ってきて、俺を心配する。
あんなにひどいことをしたのに……。いまだに俺に近づこうとする二人の思惑が全くわからず、俺は二人を睨みつけ、声を荒らげた。
どうせなら『嫌い』だとはっきり言ってほしかった。
そうしたら俺も気持ちが楽になる。
それなのに、二人は俺が思っていたのと真逆の答えを出した。
「私たちはシャルル兄さんのことが大好きですよ。兄さんにいくら嫌われようと、その気持ちは変わりません」

「そうだよ。僕たちはシャルル兄様のことが大好きだよ。シャルル兄様を嫌いになんて……絶対にならない！」

二人は真剣な表情で俺にそう訴えかけてくる。

その顔は嘘をついているようには見えなくて……二人からの言葉に胸がぎゅっと締めつけられた。

目の前が涙で揺らぐ。

「なんで……なんでお前たちは……そんな……そんなことばかり言うんだよぉ……」

泣きじゃくる俺に、ジェイドとリエンは優しく寄り添ってくれた。どれだけ暴言を吐いても静かに受け止め、決して俺のことを否定することなく、温かい言葉ばかりをかけてくれる。

そして、そっと手を握り、俺と仲直りしたいと言ってきた。

「私たちはシャルル兄さんのことを嫌いだなんて、一度も思ったことはありませんよ。むしろ、シャルル兄さんと仲良くなりたいんです」

「仲……良く……？」

信じられない言葉に驚いて顔を上げると、ジェイドは目尻を下げ、優しく微笑みかけてくる。

「そうです。兄さんと仲良くなりたいんです」

「なんでそう思えるんだ……？　俺は、お前らにひどいことを言ったんだぞ。服だって切り裂いて……」

「それは兄さんが寂しかったからでしょう？　父さんが突然再婚して、私たちが来て……自分の居場所がなくなると思って、怖かったんじゃないですか？」

――なんで知ってるんだ？

誰にも言えなかった俺の本心。それなのに、ジェイドにはお見通しだったんだろうか。

安心させようと思ったのか、ジェイドが俺を抱きしめる。リエンも小さな腕を伸ばしてきて、俺は二人の温もりに包まれた。

大嫌いだと思っていたのに、二人を突き放すことなどできなかった。俺はジェイドの胸に、顔を埋めていた。

頭を撫でられるとすごく安心して、悲しくないのにまた涙が零れてしまった。

「シャルル兄さん、一人で抱え込まないでください。悲しい時は、私たちが必ずそばで支えます。私とリエンは、どんな時も兄さんの味方ですよ」

耳元でそう囁くジェイドの声に俺はなにも考えずに反応してしまう。

「本当に……？」

「ええ、もちろん。本当です、シャルル兄さん」

――二人は俺のそばにずっといてくれる。こんな俺のそばに……

ジェイドの言葉や柔らかな笑顔に、ずっと閉じていた心が少しずつ開いていく。

リエンは明るい笑顔で元気づけ、俺を守ると誓ってくれた。

ジェイドはずっと俺を抱きしめ、何度も微笑みかけてくれた。

二人は俺の欲しい言葉をたくさんくれた。

なんでこんなにも俺の気持ちを理解できるのか不思議だったが……嫌ではなかった。

二人なりの『仲直り』としてキスをされた時は少し驚いたが……頬に当たるくすぐったい感触は意外にも心地よかった。

俺からのキスも二人は嬉しそうに受け取ってくれて、その後も何度も頬にキスをした。

涙はいつの間にか止まっていた。

「泣きやみましたね、シャルル兄さん」

「……うるさい。もうお前たちの前では泣かない……」

「そうだね。これからはシャルル兄様にたくさん笑ってもらえるように、僕たち頑張るからね！」

「ええ。もうシャルル兄さんに悲しい思いなどさせませんからね」

ありがたい言葉ではあるが、そこまで言われると兄としての威厳が保てなくなってしまう。

「そこまでしなくていい。これからは……俺が、兄としてジェイドとリエンのそばにいて、守らないといけないんだから……」

少し恥ずかしかったけれど、自分なりの決意を二人に伝えると、ジェイドとリエンは再び俺に抱きついてきた。

「シャルル兄様！　すっごく嬉しい！」

「シャルル兄さん、約束ですよ。ずっとずっとそばにいてくださいね」

さっきまで大人びたことを言っていたけれど、今は俺の胸に顔を埋めている小さな二人。こうしていると、なんだか庇護欲が湧いてくる。

そっと頭を撫でると、二人は嬉しそうな表情を浮かべ、さらに俺にくっついてきた。

そんな甘えん坊な二人が、とても微笑ましかった。

――その日の晩のこと。俺の部屋に父が訪れた。

「シャルル、少し話せるか？」

「……はい」

扉の向こうに立っていた父は、落ち込んだ顔をしていた。頬を打たれた後でなんだか気まずいが、部屋へ迎え入れる。

父はソファーへ腰かけると、俺に隣に座ってほしいのか手招きしてきた。

また叱られるんじゃないかと少し緊張しながら隣に座ると、父は申し訳なさそうな表情を浮かべて俺に謝った。

「シャルル……さっきは、叩いてしまってすまなかった」

「大丈夫です、父様。俺が悪いことをしたので、打たれるのは当然ですから……」

「だが、お前をそこまで追い詰めたのは、私だ。シャルル、すまない……」

「えっ……」

父がなにに謝っているのかわからなくて、困惑する。だが父はそのまま謝罪を続けた。

「お前になにも言わずに再婚を決めてしまったのが、そもそもの原因だった。お前が寂しくないようにと思っていたが、むしろお前を孤立させてしまった。私がシャルルとちゃんと向き合ってさえいれば、こんなに苦しませることはなかっただろうに……本当にすまない」

父はそう言って、頭を下げた。

そんな姿を見せられたら、俺はどうしたらいいかわからない。
「父様……ずるいよ……。今になってそんなことを言ってきて……」
「シャルル……」
「俺は父様がいてくれれば……それだけでよかったんだ！　母様の代わりなんていない！　だから、父様だけでよかったのに……なのに……俺になにも言わずに新しい家族なんて連れてきて……父様は俺なんて本当は……いらないんだろ……？」
「違う！　シャルルは私の大切な息子だ……。だから……そんなことを言わないでくれ……」
父は俺の言葉にショックを受けたのか、顔をくしゃりと歪めて俺を抱きしめた。怒りで目頭が熱い。父の腕から抜け出そうとしたけれど、父は強く抱きしめたまま俺を離そうとしない。
「シャルル……本当にすまなかった……」
「嫌いだ……。父様なんて……大嫌いだぁ……」
父の胸に顔を埋め、涙を流しながら何度も何度も嫌いだと口にした。
父はそんな俺の言葉を受け止め「すまない……」と何度も何度も謝りながら、抱きしめ続けてくれた。
しばらくして父の腕がゆるみ、そっと顔を上げると不安げな父の瞳と目が合った。
威厳に満ちたいつもの表情とは違い、一人の父親として不安な表情を浮かべる父を見ていると、怒りでいっぱいだった気持ちが少し落ち着いてくる。
「シャルル、私はお前のことをわかったつもりで……なにも知らなかった。母さんにお前のことを

任せきりで、仕事にかまけてばかりで……。もっと一緒に過ごす時間をとらなければいけなかったのに……」
「うん……。俺はもっと、父様と一緒に過ごしたかった。こうやって色んな話をして……俺の気持ちを、ちゃんと知ってもらいたい」
「わかったよ、シャルル。これからはちゃんとシャルルと向き合う。二人でたくさん話をして……決してシャルルを一人にはしない」
「うん、父様……約束だよ」
「あぁ、約束だ」
再び父の腕に抱きしめられ、俺はそっと父の大きな胸に顔を埋めた。ジェイドとは違う安心感に身体を預け、その晩は父と色んな話をして過ごした。
そして俺にとって長い一日が終わり、また変わらぬ朝を迎える。
……いや、色々と変わった朝なのかもしれない。
あんなに憂鬱だったダイニングへの道のりが、今朝は少し違って見えた。
どちらかと言えば、皆と顔を合わせるのが恥ずかしいくらいだ。……特に、泣き顔を見られたジェイドとリエンには。
ダイニングの扉を前にして、一度深呼吸する。中からは皆の声が聞こえる。以前は鬱陶しく感じていたはずの声が、今はなんだか安心する。
意を決して扉を開けると、皆の視線が俺に集まった。

「おはようございます、シャルル兄さん」
「兄様～！　おはよう～」
「シャルルさん。おはようございます」
「おはよう。シャルル」
ずっと見ないようにしていた皆の笑顔が、今はっきりと見えた。
――俺は、この笑顔をずっと否定し続けていたんだ。
自分の今までの行動を振り返ると、反省することばかりだ。寂しさを免罪符になにをしても許されると思っていた過去の自分は、本当に愚かだと思う。
でも、これからは違う。
俺は父の自慢の息子になり……ジェイドとリエンの兄になるんだから。
「おはようございます」
挨拶するだけでなんだか照れくさくて、ごまかすように笑顔を見せると、ジェイドとリエンが目を丸くしてこちらに駆け寄ってきた。
飛びついてきそうな勢いの二人を受け止めると、二人はそのまま俺に抱きついて満面の笑みを浮かべた。それを見ていた父とフロルさんも、嬉しそうに笑う。
――あぁ、そうか。こうやって家族になっていくのか……
腕の中には確かに、小さな二つの温もりがある。
ずっと満たされなかった心に温かな優しさを注がれ……俺はその日、本当の家族の意味を知ったのだった。

◇◇◇

シャルル兄様が僕たちに心を開いてくれてから三カ月が経ち、僕たちはかつてのような穏やかな日々を過ごしている。
『兄としてジェイドとリエンを守る』と約束してくれた兄様は、その日から人が変わったようだった。声をかければ挨拶してくれるし、目も合わせてくれる。部屋を訪れれば歓迎してくれる。
今日も僕は本を持って、シャルル兄様の部屋を訪れていた。
「シャルル兄様、本を読んでくれる？」
「ん？　今日も読むのか？　リエンは本が好きなんだな」
「うん！　大好きだよ～」
学園から帰ってきたばかりのシャルル兄様に本を差し出すと、兄様は「リエンにしては珍しい本を持ってきたなぁ」と言いながら本を読みはじめる。
兄様が言った通り、今日は僕にしては珍しく絵本を選んできた。
呪いで化け物に姿を変えられてしまった王子様を、お姫様が真実の愛で呪いを解いてあげるという女の子向けの絵本だ。
シャルル兄様は終わりまでスラスラと絵本を読んでいった。

立ち読みサンプル
はここまで